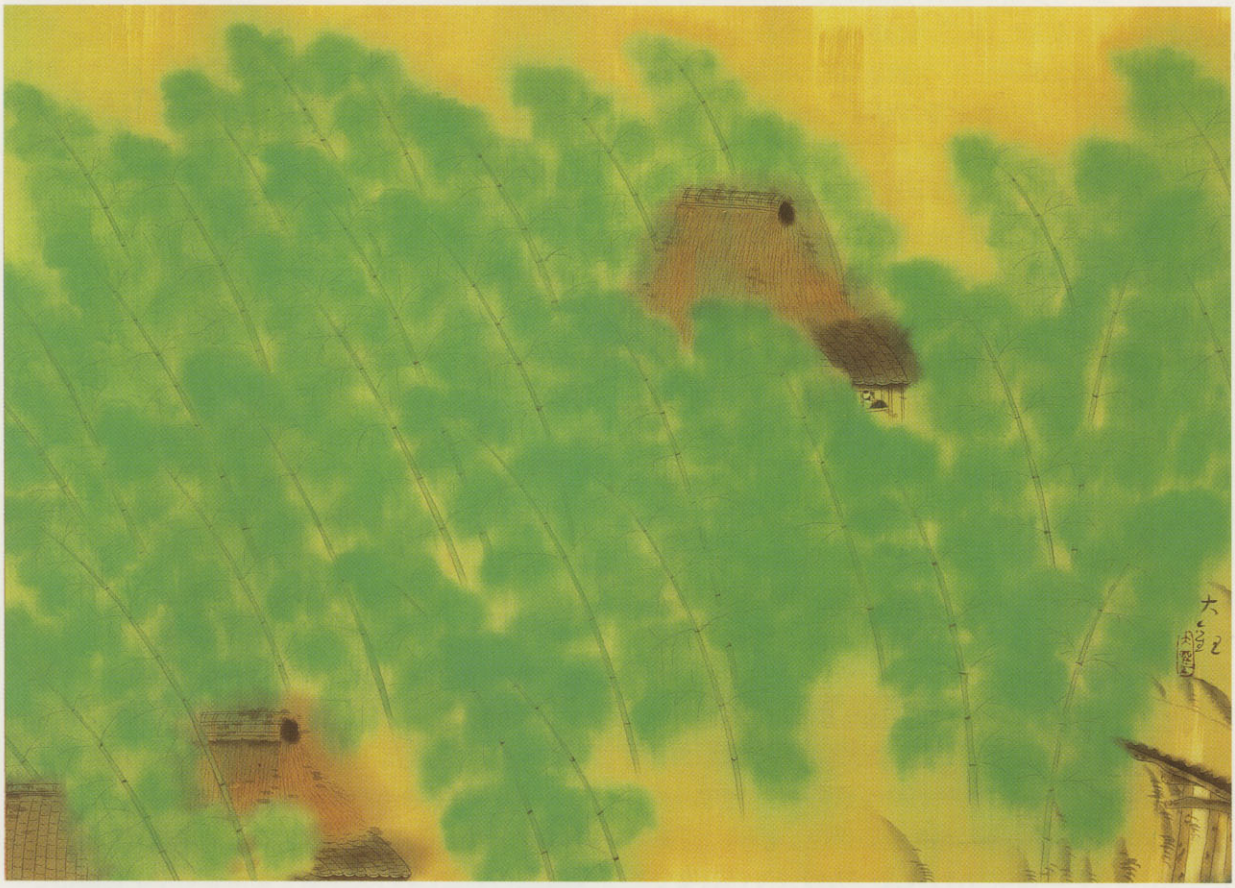
The Membership of the National Museum of Modern Art, Kyoto

京都国立近代美術館 友の会会報

2004 SUMMER 創刊準備号



横山大観　洛中洛外雨十題のうち　八幡緑雨　1919年　滋賀県立近代美術館蔵

展覧会の見どころ

近代日本画壇の巨匠

横山大観展

7月2日［金］—8月8日［日］

京都の大観

明治28年と言えば、大観は未だ東京美術学校を卒業して間もなく、伊勢神宮神苑会の古画模写事業に参加、また、岡倉天心の進めていた帝国博物館の模写事業にも参加して、盛んに模写を行っていた。丁度その頃、京都市美術工芸学校校長の今泉雄作から予科の教員として来てほしいという要請があり、大観は模写に好都合な環境であることを考えて、承諾、京都へやってきた。予科には8人ほどの学生がいたが、大観は彼らのために10枚ほど手本を作って、それを順番に写させた。このようにすると、8日ほど大観は授業に出なくてよいことになる。出欠をとったり、課題を提出させたりする仕事は、同じく予科を教えていた竹内棲（栖）鳳に任せて、大観は京都や奈良の寺に模写に出かけた。東京から菱田春草がやって来ると、一緒に出かけた。この頃大観が手がけた模写には奈良中宮寺の「天寿国曼荼羅」、禅林寺の「山越阿弥陀三尊来迎図」、雪舟筆「四季山水図」牧渓筆「観音猿鶴図」醍醐寺の「太元明王像」など、主要なものだけでも、二十を超える。

古画に用いられている技法や、古画の精神を体得するために、大観らはすぐに模写に取り掛からず、二、三日は絵と向き合って、それが目や精神に焼き付けられてはじめて模写に着手した。これは師の橋本雅邦が教えたやり方であった。こうして彼の血肉の中に記憶された古画の技法や精神は、後の大観の作品の中に、姿を一新して蘇るのである。

大観という雅号も、京都時代の産物であった。模写のかたわら、寺の僧たちと酒を酌み交わすこともあった。そんな折、経文の中に見つけたのが「大観」という言葉であったらしい。東京へもどって、天心にそれを報告すると、天心は「好い号をみつけましたね」と、喜んでくれたと言う。

大観は約一年程で、あわただしく京都を去った。大原女との見合いを斡旋する人があって、それとは別に美術工芸学校の校長今泉雄作が世話をした縁談も来て、その板ばさみとなって東京へ逃げて帰ったというエピソードが伝えられている。それはいかにも、おおらかな明治時代らしい話として面白いが、実際には、天心らが出版を始めた雑誌『国華』に英語の解説をつける仕事を、大観が依頼されたということがあったからである。帰心矢となった大観は見合いも、美術工芸学校での授業も、辞表も、校長への挨拶も、すべて放置して帰ってしまった。

横山大観　喜撰山　大正8（1919）年　第6回再興院展
喜撰山は喜撰嶽とも呼ぶ。標高416メートル。六歌仙の一人、喜撰法師が隠棲したと伝えられる。現在は山頂に揚水ダムがあり、天ヶ瀬ダムから揚水し、昼間に発電している。最大出力466,000キロワット。

翌明治二十九年五月、大観は東京美術学校図案科の助教授となる。二年後の明治三十一年、東京美術学校に騒動がおこり、天心は学校を去るが、それと連袂辞職した大観らは日本美術院を創設して、十月には日本絵画協会第五回・日本美術院第一回連合絵画共進会を開いた。この展覧会に大観は「屈原」を出品して、讒言によって国を逐われた中国古代の楚の国の大臣、屈原に岡倉天心を譬え、その悲憤の情を表した。

明治から大正時代の初めにかけての大観は、新しい日本絵画の創造という大事業を菱田春草や下村観山と一緒に追求し、朦朧派などの悪口を叩かれながらも、また、美術院の経営の困難に直面しながらも、その達成を夢見、実現した、最も充実した時代であった。天心亡き後の大正三年、大観は日本美術院を再興し、その運営を委ねられた。

大観の京都時代は、まさに大観の青春というべく、その心の内に、生涯にわたる芸術のゆたかな種子を育んだ時代ではなかったであろうか。　（加藤類子）

美心短信

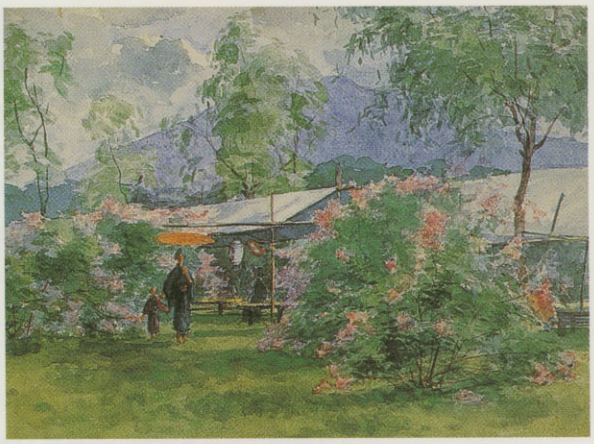
岡崎の萩

「ただ夢のように脳裡にうかびあがるのは、私が京都に住みつくことになった明治末期に近いころの、あのあたりの静寂なたたづまいです。その頃は＜岡崎の萩＞と呼ばれ、ちょっと名が通っていただけに、今の美術館の向こう側あたりを中心に、あの辺一帯には沢山の萩の株があって、その間に花どきになると緋もうせんのかかった床几や雪洞（ぼんぼり）が点在して、風流めいた空気が漂っていたものです。……そんな情景をあたまに残して、間もなく十何年の外国生活をおわって、帰ってきた時は、そのおもかげは全く消え去って、そこには図書館をはじめ勧業館とか陳列場とかはっきりした名称をおぼえないが、お役所的な感じの木造洋風建てのものが出来ていて、展覧会や時には博覧会と称するお粗末なバラックが出来たり取りのぞかれたりもして、とにかく落ち着いた環境ではなかったが……」（以下略）

1974年に出た『京都市美術館四十年史』に、洋画家の霜鳥之彦が寄せた小文の一節を拝借したのであるが、明治末から大正時代にかけての、岡崎公園の変遷を知ることができる。霜鳥が「あのあたり」と書いているのは京都市美術館のあたりのこと。また、「今の美術館の向こう側」と書いているのは、どうやら現在の岡崎グラウンドあたりらしい。「萩の馬場」という呼び名で呼ばれていたところかも知れない。

私たちの美術館に、その地理的な位置を推測することのできる一枚の水彩画がある。田中善之助が明治40年頃に画いた＜萩と茶屋＞であるが、きれいに咲き極まった萩と茶屋の向こうに比叡の嶺と手前の黒谷の緑の岡が画かれている。この風景はそのまま、私たちの美術館の4階からの眺めである。もう、萩も茶屋も姿を消して百年近いのだろうけれど、比叡の嶺や黒谷の岡やその上に建つ三重の塔は昔と変わらない。

この小文を書いた霜鳥之彦（正三郎）は東京の人。明治33年から35年にかけてヨーロッパに留学した後、東京美術学校を辞任し、新設の京都高等工芸学校の教授



田中善之助　萩と茶屋　明治末期

としてやって来た浅井忠を慕って、住居を東京から京都に移し、京都高等工芸学校の一期生として図案科に学んだのであった。卒業後すぐに渡米し、9年間同地で学んだため、師の訃報もそこで聞いた。一方、この作品の作者である田中善之助は、初め日本画を学んでいたが、明治36年、浅井忠が自宅の敷地内に開設した聖護院洋画研究所に入塾して、浅井の教えを受けた。新しい時代に即した絵画を創造することにも意欲的であった彼は、明治43、44年の「黒猫会（シャ・ノワール）」や「仮面会（ル・マスク）」の結成にも加わり、大正末には関西美術院の教授となるとともに、春陽会の設立にも参加した。＜萩と茶屋＞は、明るく、透明感のある表現が、浅井の真摯な指導と影響を想わせるが、田中善之助の他、加藤源之助、長谷川良雄、都鳥英喜、梅原龍三郎、安井曾太郎ら、浅井の指導を受けた洋画家たちは、この岡崎の地を中心に、東山の麓、鴨川の河原、下鴨、糺の森、上賀茂、八瀬など、約1世紀前のなつかしい京都の風景を、多く残しているのである。

なお、聖護院美術研究所は、明治39年には「関西美術院」となり、浅井忠が院長となった。しかしそれもつかの間、浅井は翌明治40年に世を去り、かつてパリ滞在中に浅井に会い、新設される京都高等工芸学校へ彼を誘った中沢岩太が、院長に就いた。その中沢はまた、明治41年、フランスから帰国にした洋画家鹿子木孟郎に、院長の職を譲っている。鹿子木は大正4年までこの職に留まり、後を太田喜二郎に託した。めまぐるしい変遷を経ながらも、「関西美術院」は岡崎の地、かつての萩の茶屋の近くを離れず、多くの洋画を志す人々を育ててきたのである。

（加藤類子）

友の会会員募集について

きばって見るのではなく、今日は河井寛次郎のやきものだけを観てこよう、長谷川潔の銅版画を久しぶりに観たい、帰りには1階の喫茶室でひと休みして、ミュージアム・ショップに寄って、というような気分になられたら、会員証を見せればいつでも、何度でもご入場いただける友の会をご利用くださると便利です。あるいは、特別会員や法人会員になって、美術館を少しサポートしてやろうという方も大歓迎です。いつでもご入会いただけます。友の会の会員には、次のような種類と特典があります。

□一般会員

年会費　一般5000円／学生3000円

特　典
- 常設展示が随時観賞できます。
- 京都国立近代美術館の企画展、特別展を観賞できます。(1回)
- 国立美術館(国立国際美術館・国立西洋美術館・東京国立近代美術館)の常設展示が随時観賞できます。また、国立国際美術館に限り、企画展を観賞できます。(1回)
- ミュージアム・ショップの商品が割引購入できます。(一部除外商品もあります)
- 喫茶室(カフェ・ドゥ505)利用に優待があります。
- 友の会会報、講演会、見学会等のご案内を送付します。

□特別会員・法人会員

年会費　特別会員　20，000円／法人会員　1口100，000円

特　典　一般会員の特典の外、次の特典があります。
- 常設展示の観覧券年間20枚(特別会員)／年間100枚(法人会員)
- 企画展の招待券を企画展ごとに2枚(特別会員)／10枚(法人会員)
- 特別招待状(展覧会のプレ・ビュー)を展覧会ごとに1通(図録引き換え券1枚進呈)(特別会員)／3通(図録引き換え券3枚進呈)(法人会員)※但し、図録引き換えは展覧会会期中のみ可。
- 法人会員には、図録を1冊送呈いたします。
- 京都／奈良国立博物館を団体料金で観賞できます。
- 美術館ニュース、友の会会報、ポスター・ちらし(ご希望の場合)を送付いたします。講演会、見学会のご案内を送付いたします。
- その他、ミュージアム・ショップ、喫茶室等のご利用については、一般会員と同様です。

□募集期間　年間を通して、いつでも入会できます。

□申込方法　新規入会ご希望の方は、ハガキにご住所、ご氏名、電話番号またはEメール、FAX、生年月日、性別、学校名、勤務先、法人の場合は口数をお書きくださり、ご希望の会員の種類をお選びの上、事務局宛お送りください。会費は下記の郵便口座または銀行口座にお振り込みください。なお、美術館1階受付で入会手続きをすることもできます。

□事務局　京都市左京区岡崎円勝寺町　京都国立近代美術館友の会
電話：(075) 761-4111／ファックス:(075)752-0509

□振込先　郵便振替口座:00940-7-189550／口座名:京都国立近代美術館友の会
銀行口座:みずほ銀行百万遍支店(普通)2338632/口座名・上に同じ

● 開館時間
午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)
● 夜間開館
概ね4月から10月までの企画展開催中の金曜日
午前9時30分～午後8時まで(入館は午後7時30分まで)
● 休館日
毎週月曜日(月曜日が休日に当たる場合は、翌日が休館)、及び年末年始
(開館時間、休館日は臨時に変更する場合があります)

※お車でお越しの場合　**岡崎公園駐車場(地下)**をご利用の**有料入館者**は、**駐車場の割引**(1台1名)を受けられますので、**駐車券をお持ちの上**お越しください。

● 交通案内

独立行政法人国立美術館
京都国立近代美術館
The National Museum of Modern Art, Kyoto
〒606-8344　京都市左京区岡崎円勝寺町
TEL. 075-761-4111
テレフォンサービス 075-761-9900
ホームページ　http://www.momak.go.jp